

基調講演 「親が変われば子が変わる」

皆さん、こんにちは。「親学」という言葉を初めてお聞きになった方々が多いのではないかと思います。実は東京で9月19日に「親学会」というフォーラムを開催いたします。基になったのは、オックスフォード大学のトーマス学長が、ドイツで行なわれた世界の学長会議で提言されたのがきっかけでした。このことは昨年1月3日から5日の読売新聞に連載されていますので、ぜひご覧ください。その学長会議で、トーマス学長はこういう提言をされました。これが「親学」のスタートであります。少し省略しますが、「学校でも大学でも教えていないのは、親になる方法である。親としての教育にもっと関心を向け、向上させることには大きなメリットがあるのではないか。半分冗談だが、子どもを教育するにあたり、困難さと責任について自覚しているかどうかを証明する試験に受からなければ、子どもを作ってはいけないというのはどうだろうか」と、おっしゃったのです。

お配りした資料を見ていただけますか。これは8月23日に日本PTAの全国大会が埼玉で開かれました。その時に私が基調講演をした資料です。親学会を東京で準備したのは、一年前です。特に政策のレベルと具体的なレベルと、両方から会を重ねてきたわけですが、今、教育の危機が叫ばれています。何が教育の危機の根本なのかということが大事なんですが、東京では主に小児科医、遺伝子研究の専門家、主婦、私のような教育者、いろんな方たちがいろんな立場で取り組んでいます。これはまもなく「親学のすすめ」という本で出版される予定ですが、「親学とは何か」ということが定義づけられているわけではありません。ただ、基本的には、親になるための学びと親としての学びを意味していることを前提にお話していきます。

教育界は、どうしても責任転嫁をします。何か事件が起こると、学校が悪い、教師が悪い、文部省が悪い、日教組が悪いというふうに、自分以外の誰かが悪いという発想で教育を考える。そして事件が起きると、校長が記者会見をして謝罪する。こんなことをいくら繰り返していても、問題の解決にはなりません。まず、大人たちが、問題とどう関わっているか。例えば、問題行動には、いじめ、不登校、高校中退などがありますが、実は問題というものに、親や教師がどう関わっているか、その関わり方が問題なのです。教育の危機をひと言で言うと、私は「関係性の崩壊の危機」と言っているんですが、親と子がどう関わっているか、間のとり方をどうしているか。押したり引いたり、厳しくしたり優しくしたり、その間のとり方、ここにすべてがあるわけです。私は今年の3月まで、自治省の青少年健全育成の研究会の座長を務め、全国の都道府県に政策提言をさせていただいていました。最初、自治省のお役人と話をした時、私の考えを申し上げました。「青少年を健全に育成するというこれまでの考えに、私は異論があります」と。これはどういうことかという、大人は健全で子どもは不健全だという前提がありますが、私はそうは考えていな

いのです。大人が健全ではない。健全でない大人をどうするかというところから青少年育成を考えないと、根本が間違っているのではないかと申し上げました。

問題というものは、とても大事な課題を大人たちにつきつけています。ところが、問題は子どもにあるんだと考えていて、子どもを変えよう変えようとしているのですが、子どもはなかなか変わりません。子どもと関わっている親や教師が、子どもの見方や関わり方、そして自分自身が変わること。実は、これが子どもを変える最も近道なんですね。私はそのことを十数年、全国を周りながら、34歳から3年間、政府の臨時教育審議会の専門員をさせていただいて、毎週3時間、制度改革の議論をしてきました。制度を変えることは今も大事だと思っていますが、もっと大事なのは大人が変わること。特に親が変わることです。しかし、親が変わるといのは、とても難しいことです。では、どうやって変わればいいのか。それが、親学の出発点であります。

資料を見てください。冒頭の問題提起につながるものですが、最初はマザーテレサの言葉を引用しております。「誰からも必要とされていないという貧しさこそ、一切れのパンの飢えよりも、もっと酷い貧しさといえます」。今、アフリカやアジアのストリートチルドレンのことが問題になっています。ところが、この子たちの方が、はるかに目は輝いていますし、イキイキしています。日本の子どもたちは、モノには恵まれています。目は輝いていない。イキイキわくわくしていません。5歳児に「将来何がしたいの?」と聞いても、下を向いて「別に...」と言います。5歳児がもう元気がない。元気がないのは、大人たちの責任です。なぜ、元気がないのか。これは、大人たちがどう関わってきたのか、どういう環境を作ってきたのかということになるのではないかと思います。

次に、重度の脳性小児まひの少年、これは最近、本が出ておりまして、ベストセラーになっているようですが、次のような詩を残しています。「ごめんなさいね、お母さん。ごめんなさいね、お母さん。僕が生まれて、ごめんなさい。僕を背負う母さんの細いうなじに僕は言う。僕さえ生まれなかったら、母さんの白髪もなかったらうね。大きくなったこの僕を背負って歩く哀しさも、かたわな子だねと振り返る冷たい視線に泣くことも、僕さえ生まれなかったなら」。この詩に対してお母さんが「私の息子よ、許してね。私の息子よ、許してね。このお母さんを許しておくれ。お前が脳性まひと知った時、ああごめんなさいと泣きました。いっぱい泣きました。いつまでたっても歩けないお前を背負って歩く時、肩に食い込む重さより、歩きたかろうねと母心。重くはないと聞いているあなたの心が切なくて。私の息子よありがとう。ありがとう息子よ。あなたの姿を見守ってお母さんは生きていく。哀しいまでの頑張りとお前をいたわるほほえみのその笑顔で生きている。脳性まひの我が息子。そこにあなたがいる限り」と、詩を書きました。その後は皆さんの資料にありますね。

次に、この子はお母さんにこんな詩を書いたのです。「ありがとうお母さん。ありがとうお母さん。お母さんがいる限り僕は生きていくのです。脳性まひを生きていく優しさこそが大切で、哀しさこそが美しい。そんな人の生き方を教えてくれたお母さん。お母さん、

あなたがそこにいる限り」。

次はまた別の小児まひの子どもの詩です。「母さんありがとう。母さんが守ってくれた命。ありがとう母さん。僕は今、たくさんの温かさを知りました。何もできない僕だけど、何となく幸せ。小児まひにしてくれてありがとう」。こういう詩を書いています。

P T Aの全国大会のテーマは「本当の幸せってなあに？」でした。今、果たして私たちは心の幸せというものがどれだけ家庭の中で家族が感じているだろうか。そんなことを重いながらこれをまず紹介したわけですけども、あったかい心を実感することの中に幸せがあるのではないかと。そんな思いがしたんですね。

次は進行性筋ジストロフィー症で、14歳でお父さんに病名を告げられ、「案外短いんだね」と猛勉強を始めた子どもがいます。彼はこういう詩を書いています。「例え短い命でも生きる意味があるとすれば、それはなんだろう。働けぬ身体で一生過ごす人生にも生きる価値があるとすれば、それはなんだろう。もしも人間の生きる価値が社会に役立つことで決まるなら、僕たちは生きる価値も権利もない。しかし、どんな人間にも差別はなく、生きる資格があるのなら、それは何によるのだろうか」。こう書いて猛勉強を始めました。彼に将来はありません。私は中高生によく講演に行きますが、必ずこの詩を紹介し、この中学生はなぜこの病名を告げられて猛勉強を始めたんでしょうかと聞いています。中高生はなかなか答えられないんじゃないかと思いましたが、見事に鋭い答えがどんどん返ってきました。多くの共通意見は、おそらく、この14歳の少年は、自分の生きる意味や生きる価値というものを発見するために猛勉強を始めたんじゃないでしょうか。この答えが一番多く返ってきます。現実の勉強は、将来のための準備や手段です。大学に入るため、あるいはいい高校に入るためです。ところが、この子には将来がありません。余命いくばくもないわけです。何のために学んだらいいんだろうか。何のために勉強したらいいんだろうか。今、不登校がどんどん増えていますが、そこには、この根本問題が突き付けられております。桂三枝が創作落語で大変面白い落語をやりました。家でごろごろしているとじこもりの若者におじいちゃんがお説教します。「ええかげんに働いたらどうや！」と。すると「働いたらどうなるんや」と聞き返してきます。「働いたらお金が手に入る」。「お金が入ったらどうなるんや」と聞きます。「お金が入ったら自由に時間が過ごせるようになるんや！」。そして「おじいちゃん、だから僕は今こうやって自由に過ごしているんや」と。こういう落語だったんですね。つまり、何のために勉強するのか。それはいい大学に入っていい会社に就職するためであるとするならば、じゃあ偉い人になって幸せなのか。偉い人はそれで立派なのか。実は今、そのことが問われているんです。不登校という問題の根本には、大変深い「何のための学校なのか。何のための勉強なのか」ということがあるんだと思うんですね。

さて次です。なぜ、今、親学なのかということに関わってくるんですが、ちょっと読んでみます。「情緒不安定で衝動性、攻撃性が激しく、目を合わせられない幼児が増えています。便利で効率的な近代的な子育てシステムが、親子の心の絆を引き裂き、わが子を愛せ

ない症候群の母親と児童虐待の急増をもたらし、精神的孤児を生み出す現況になっているのではないのでしょうか。」

これは右側の方、ここに書いてありますのは、私が産経新聞に来週月曜日に書く原稿です。私が一番講演する機会が多いのは保育士に対してです。その保育士の方々が私にどういことを言われるかと言うと、今、少子化対策として保育所の待機児童ゼロ作戦というのが進められていまして、来年までに15万人の受け入れ児童数の増大が図られています。ところが、実際、保育士たちがどう感じているかと言うと、駅前保育所はマンションの一室に閉じ込められているためにストレスがたまって髪の毛をむしり、頭のとっぺんに丸いハゲが出来てしまっている子どもがいる。駅前にどんどん保育所ができる。そしてそれは、マンションの一室に閉じ込められているケースが多いために、ストレスをためる子どもがたくさんいるというんですね。それから、母親は自分が楽をするために、荷物の一時預かりと同じ感覚で、朝早く子どもを預け、遅くに受け取りにくる。その時間、どちらも子どもが寝ているというんです。そして、子どもはサラリーマンと同様、家に寝に帰るだけで親子のコミュニケーションが一切ないと。こう言うんですね。これでいいんだろうかと。そして延長保育やゼロ歳児保育が、親が子育てを通して学ぶ機会を奪い、親や保育者自身の長時間労働を促進しているのではないかと。そんな疑念があるというわけです。あるいは働く母親の都合ばかりが優先されていて、子ども不在の子育てになっているのではないかと。全部がそうだとは言いませんが、こういう声が大変多く寄せられています。

これはある意味で大変難しい問題です。実は、PTA全国大会でも私が1時間基調講演をして、その後20分文部省の方が、社会の宝として子どもを育てようという講演をされました。育児の社会化ということですね。今まではお母さんが子育てをしてきたけれども、これからは父親も参加し、地域が子育て支援をして、社会の宝として地域全体で子どもを育てよう。これが、今の国の方針です。それ自体、私は間違っているとは思いませんし、好ましいことだと思っていますが、果たして、子どもが宝のように大切に扱われているだろうかという実態には疑問があります。そこで、資料を見てください。

これは産婦人科医のオオノアキコさんの書いたものですが、保育器の赤ちゃんが、抱き上げられても決して目をあわそうとしないという事実があるというんですね。目を合わせないというのははっきりとした子どもの意志であると。つまり、あえて目を合わせようとしない乳児が増えているわけですね。決して目を合わせようとしない子供たちの拒絶感と孤独感、怒りと悲しみの意思表示はどこに向けられているのでしょうか。その近代的な子育てシステムの中で、例えば、母親と子どもが至福の対面をする時がある。その時、母親がどういうふうに子どもとコミュニケーションするのか。そんな大事な母と子の会話というものが、近代的な子育てシステムの中で、奪われてしまっている。そういう面があるというわけですね。

その次。8と書いてあるところですね。20世紀末に相次いだ少年の凶悪事件。神戸市の児童連続殺傷事件、愛知県豊川市の17歳の少年が主婦を殺害した事件、あるいはバス

ジャック事件、そういう背景にも少年たちの拒絶感と孤独感があったのではないか。これは少しコメントしておきたいと思います。児童連続殺傷事件を起こしたA少年が、事件の動機をどう供述したかという「人の壊れやすさを確かめるために実験することにした」と。愛知豊川市の17歳の少年は、1833人の県内模擬試験で16番か17番という優等生です。彼が主婦を殺害した動機は「人が物理的にどのくらいで死ぬのか知りたかった」と。これらは共通していますね。事件は異常ですが、動機は共通しています。そして弘前大学の入学試験にこういう小論文の問題が出たんです。「人の命をなぜ殺してはいけないのか」。そんな入試問題が出る国は日本しかないでしょう。人を殺してはいけない。それは、頭ではわかっているけれども、魂や心ではわからない若者が増えてきているということです。なぜ人の命を殺してはいけないのか。自明であったことが、なぜかわからないという子たちがだんだん増えている。それは、さまざまなところから指摘されています。例えば、ミサワナオコさんという方は、「殺意を描く子どもたち」という本を書かれました。そうして、1981年の時の子どもの絵と、20年後の今日の絵とどこが違うかを比較しています。一番の特徴は、家の存在が小さくなっていること。1981年の家は家が大きく描かれています。ところが20年後の今日は大変小さくなっている。つまり、子どもにとっての家という存在がひじょうに希薄になったわけです。2番目の共通点として言っているのは、顔が表情にないということ。自分が生きているという存在感、自己肯定感がないということにもつながりますが、日本の子どもの一番の欠点は、今、自己肯定感がない、自尊感情が育っていない、自分がかげがえのない存在をもって生まれてきたという自信がない、そういう表明です。神戸のA少年が「透明な存在」という言葉を3回も犯行声明に書いたのも、そのアイデンティティの危機、自分自身がそれを失えば自分でなくなってしまう...自分というものの価値がわからないということでしょう。あるいは破壊的な絵、攻撃的な絵、衝動的な絵が増えたということも出てきます。正義感のとっても強い子が、竜巻きに巻き込まれて吹き飛ばされている絵を書いている。例えば、いじめがあったら、そこに止めに入る。止めに入ったらみんなからいじめられる。そういう現実がある。そういうようなことが、出ていますね。

これは朝日新聞が取り上げたものですが、ゲームにずっとのめりこんでいる子は、その書いた絵の中に、キャラクターと実際の家族が混在している。つまり、仮想と現実が一緒になってしまっている。最近、モリアキオという方の「ゲーム脳の恐怖」という本が出ました。小さい頃からずっとゲームにのめり込んでいる子は、前頭ぜんやという頭の中の人間らしさを扱う、激しい情をコントロールする場所があるんですが、その機能の低下を起こしてしまう。そこで、ムカツキ、キレルということが起きてんだということを詳しく書いています。最近、国立教育政策研究所が、キレル子どもの成育歴に関する研究という報告書を出しました。これは文部科学省や厚生労働省、さまざまなところが共同して研究したものです。そこでも、「3歳児崩壊」という言葉が出てきます。学級崩壊も、幼児から始まっている。これは朝日新聞も「幼児に学級崩壊の面」という大きな記事を載せましたが、

それが実証された形です。キレルということが、3歳から起きている。もちろん、キレルということが何歳から起きているかは、なかなか実証できないものですが、すでに幼児からキレルということが見られることが詳しく報じられています。その最大の背景は家庭に要因があります。親が子どもとどう関わっているか。養育態度と書いていますが、不適切な養育態度がキレル子どもを生んでいるということを詳細なデータで分析しております。一番は過度の統制です。甘やかし。過保護。過干渉。これらがキレル子どもを生んでいる。しかも、もう3歳からそういう子たちが出てきている。そういったことが詳細な報告・データのもとに分析されておりますので、詳しくは「キレル子どもの成育歴に関する研究」という本もお読みいただきたいと思います。

今、東京では「親学会」をどう研究しているかといいますと、胎児期。お腹の中の胎児にどう関わればいいのか。それから乳幼児期。乳幼児期の子どもにはどう関わればいいのか。児童期の子どもにはどう関わればいいのか。青年期の子どもはどうか。その発達段階に応じて子どもとどう関わっていけばいいのかということを研究しております。日本には大変素晴らしい子育ての知恵があります。「しっかり抱いて、下におろして歩かせろ」という言葉があります。しっかり抱くというのは、受容する。ベーシックトラスト、基本的信頼感という言葉がありますが、乳幼児期に無条件の愛情と信頼を子どもに注いであげる。その愛情と信頼の分だけ、子どもが大きくなったら、人を信頼できるようになるという……これが、しっかり抱くということです。まず、ここがうまくいっていない。だから児童虐待が起きているということも一つの現象です。「わが子を愛せない症候群」という言葉がありますが、父性、母性共に父親、母親から少しずつ失われつつあるという現実があります。それから、下におろす。これは分離です。私は多摩動物公園で年に一度授業をやりま。例えば、オランウータンやチンパンジーの子育ての解説をしてもらう。毎年動物を変えて学生たちに解説員の話をお聞かせするんですが、今年はオランウータン4頭の子育ての話をお聞きました。一番年寄りのオランウータンは、我々見学者をジーッと見ております。その視線がパッと動いた時に、あれはどのような心理なのかを解説してくれるんです。すると、だんだんオランウータンが見えてきます。前の年はチンパンジーでした。チンパンジーはわが子を6ヶ月抱いて下におろします。それ以上甘えてきてもはねつける。抱く時と分離する時をきっちり区別しているわけです。ところが日本の親の方は、むしろ母子分離不安があるように、お母さんも子どもから離れられない。子どももお母さんから離れられない。そういうことが起きています。チンパンジーよりももっと、受容と分離の時期がうまくできていません。

私が保育士のところで講演をする時に何を求められるかということ、児童の最善の利益とは何かというテーマです。児童の最善の利益というのは、児童の権利条約の第3条にある言葉なんですね。問題は、何が児童の最善利益なのかということです。目先の利益を保障することが子どもの最善の利益になるわけではありません。ところが今の親たちはすぐに子どもに媚びてしまう。だから、子どもが、自分で自分を律するということができない。私

は、学級崩壊を起こしている学校の先生からいろんな相談を受けましたが、中にこんなのがあって驚きました。「静かにしなさい」と注意をしたら「僕の人生だから僕が決める」と言ってきた。そんな子は例外的かもしれませんが、それは個の自立、自分が自立するという理屈なんです。例えば、自分の勝手というのは、今の子どもの言い分です。

トライアルウィークという地域で体験学習するという試みは全国31県に広がっています。私は自治省の提言で、これを全国に広げようということをしたんですね。なぜ兵庫県のトライアルウィークに注目したかということ、1年目にこういう中学生が出てきたんです。不登校児の78%が5日間地域で体験活動するだけで、学校に戻ってきたんです。だんだん心のエネルギーがわいてきて、学校に来れるようになった。ところが2週間、中学校で授業を受けているうちに、だんだん元気がなくなって、登校率が34%に落ちてしまった。ひじょうに考えさせられますね。地域で体験活動していると子どもたちが心を開き、不登校児が心のエネルギーをどんどん発揮していく。ところが中学校で授業を受けていると、だんだんエネルギーが落ちてしまい、不登校に戻ってしまう。これが明確なデータとして出てきたわけです。そして今や3年を終えましたが、5日間の体験活動が不登校児にどういう成果があるかという詳細な統計が出ております。私は、とりわけ長い間学校に行けない子ども、神経症的登校拒否をどうするかということに関わっておりますけれども、そういう面から見ても、5日間の体験活動がこんなに劇的な成果を生むというのは注目すべき事実です。自治省のお役人、あるいは研究会のメンバーで視察をした時も、不登校の専門家たちも目を丸くして、その成果に驚いたわけです。

なぜ、5日間の体験活動が子どもたちの心を開いているのか。例えばある中学生、ガングロの女子中学生が、おばあちゃんのお世話をしたいと希望したんです。兵庫県のトライアルウィークの特徴は、中学生が希望することを尊重するということです。与えられた体験ではなく、自分がしたいと希望する体験を成功することで不登校児の自信をつける。小さな成就感、達成感を少しずつ積み重ねながら、5日間を通して大きな自信にしていくんですね。ガングロの女子中学生は、先生から校則で禁じられていると注意を受けました。でも、無視しました。関係ない。私の勝手。親がいくら注意しても聞きません。ところが、初めて会った時、おばあちゃんが「怖い。いつもの人を呼んで」と言った。おばあちゃんは顔の黒い女子中学生なんて見たことがないので、恐怖感を持ったんですね。その時に、その子は初めて気づきました。自分の勝手ではないんだと。おばあちゃんが自分をどう感じるか。怖いと思われたら、おばあちゃんとながっていくことができないんだということに気づいたんです。つまり、豊かにつながり合う体験というものを通して、自分を律するということを学んだんですね。それで初めて自立できるんです。ところが、今の教育は、豊かなつながり体験というものをしっかりさせる体験が欠けています。これには、いくつかのキーワードがあるんですけれども、一つは「りゅうかんどう」。これは、北海道の家庭学校の教育方針です。北海道家庭学校というところは、男子教護院で、手錠をはめ、腰紐をつけて連れて来られる男子が、もっぱら体験をします。自分は何をしたいか、体験が

選べるんですが、自分が汗を流す体験を通して、「ごどう」目に見えない価値に気づくと。こういうことをやっていますが、今のガングロの女子中学生もおばあちゃんにつながるという体験を通して、自分の価値に気づいたわけですね。もう少し例を挙げると、私が16年ほど全国の現場をまわりまして、影響を受けたのは、仏教じとく学園というところです。ここは、家庭裁判所が指定してここに入りなさいと、親や家庭環境が悪すぎるために家に戻ったらもっと悪くなるということで、ここに入れるんです。非行少年たちはここで何をしているかという、1日6時間、銘石という自然石の傷を磨くんです。ひたすら石の傷を磨きながら、お医者さんになるなど、劇的に立ち直っています。感想文の中には「これからは僕の心をピカピカに磨いていきたい。僕の人生を磨いていきたい」と書いています。何が子どもを変えているかという、自己発見なんです。本当の自分に出会う。彼らはもう自暴自棄になってあきらめている人間です。極悪非道の犯罪を犯してきて、ここでどんなに立ち直ったって、世間からは非行少年というレッテルをはられ、もうどうにもならない。そんな子たちです。その現実を突き破って、自分の本質に触れる。本当の自分に触れる。その時、子どもたちは劇的に変わります。今の教育は、自分以外の知識をいっぱい教えている。でも、本当の自分に出会うという機会がない。なぜ本当の自分に出会えないかという、事勿れ主義とか、安全主義という壁があるからです。例えば、群馬に「しなねかいぜんがっこう」という私立の学校があります。100キロ競歩というのをやります。100キロ歩き、ワンワン泣きながらゴールインしてきます。これは哀しくて泣いているのではなく、うれしくて泣いているんです。自分だってここまでやれるんだと。(テープつなぎ目)

でも、それがなぜできるかという、子どもは限界を突き破らないと、本当の自分に出会えないんです。だから、もし事故が起きたら、死者が出たらという質問も校長先生に浴びせられます。校長の答えは極めて簡単です。「その時は自分が責任をとります」。簡単ですが、とても重い言葉です。兵庫県のトライアルウィークという活動がなぜ成功したかといいますと、長田中学校の校長先生が「スリーデイズチャレンジ」を成功させたことが全体に及んだきっかけです。長田地区は阪神淡路大震災で大きな打撃を受けました。家がなくなり、家族を失った子どもたちが不登校になり、あるいは学校でも荒れて学校崩壊に近い現実になりました。子供たちに元気を出したい。そのために子供たちの希望を聞いて、校長が先生たちに向かって宣言しました。子どもたちがしたいことをぜひ実現させてほしい。全部の希望を聞いて先生方がそこについて約束をとりつけ、ぜひ実現させてほしいと。でも、荒れている子たちですから、あちこちで摩擦が起きるんですね。レストランでじゃがいもを蹴飛ばした子がいます。ぶん殴られました。学校でこれをやると体罰で大騒ぎになります。でも、地域ではそうならない。じゃがいもを蹴飛ばしたら殴られるのは当然です。本人も納得しているわけですね。いろんな摩擦を繰り返しながら、3日間りっぱにやり遂げるんですね。そこでは名札に会社と退社の時間が書いてあるんですが、3日間終わっても、特にツッパリと言われる子たちもみんなしてくるというんですね。それは、自分

達もやる時はちゃんとやるんだということを先生に見てもらいたいからだというんです。そして、たった3日間でよみがえったんですよ。これも、校長先生はすべて自分が責任をとるといったところから始まったんです。

私は感性教育研究所というものをつくっていますが、感性や心は、手間暇かけないと育たないんです。ところが手間暇かけるというプロセスが省略され、近代的な子育てシステムという大きな流れができつつある。手作りの教育なんてのがあるから、プレッシャーがかかるんだとか、そういう風潮が逆に大きな流れになりつつあるんですね。とても残念なことだと思います。

資料、右の上。カッコのなかにつつまれているのは、神戸の連続殺傷事件で殺傷された子どものお母さんがA少年に向けた手記です。「もし、私があなたの母であるなら、真っ先に思いっきり抱き締めて、共に泣きたい。言葉はなくとも一緒に苦しみたい。今まであなたは母である私を越えて、いったいどこを見ていたのでしょうか。私の声があなたの乾いた心に届き、ゆさぶることはなかったのでしょうか。あなたが生まれてくることを楽しみに待ち、大切に育ててきたのだと教えてきたのでしょうか。思いっきり抱き締めて、あったかい血の流れを伝えてきたのでしょうか。そしてあんな恐ろしいことをしてしまうまで、自分を追い詰めていくことにどうしてもっと早く気づいてやれなかったのでしょうか。たった一人の母なのにどうしてわかってやれなかったのか。氷のように冷たく固まってしまったあなたの心。そのうえそれを深い海の底に沈めてしまった。でも、深く暗い海底からそれを探し出し、ていねいにゆっくり氷を溶かし、ゆったりとほぐすことができるのは、親の愛しかない。とりわけ母の愛が太陽のあたたかさで包み込む以外に道はないと思うのです。」

自立ということを支えるのは、愛であります。愛と自立というのは、一体の関係です。でも、今の日本の子供達を見ていると、愛が十分に注がれていないのではないかと。モノには恵まれています、愛情には飢えている。そんな子たちが、私には気になって仕方がないのです。ヨーロッパで「ノミのサーカス」という番組を見ました。ノミにサーカスを教える時、筒の中に入れるんです。ノミはその中をジャンプします。ところがだんだんジャンプしなくなり、最後は這うようになります。這うようになったら、筒の中から取り出しても2度と飛ばない。そこでサーカスを教えるという番組でした。僕はそんなものかなあと思って日本に帰り、オザキカズオという人の「虫のいろいろ」という本を読んでいたら、同じことが書いてありました。ガラスの玉の中にノミを入れるんです。ノミはその中をジャンプしています。それがだんだん這うようになる。そうなったらもうガラスの玉から出しても2度とジャンプしない。そこでサーカスを教えるということが書いてありました。僕はそれを読んだ時、日本の子どもが今、飛ばなくなったと思ったんですね。肉体ではありません。心のエネルギーのことです。子どもは本来、イキイキわくわくしているはずなんです。ところが、その子供たちに夢がない。チャレンジしない。そういったノミの状態になっている。なぜか。それは大人たちがどう関わってきたかの総決算です。子どもは大人の間わり方の反映です。大人たちがどう関わってきたかということが、今の姿です。そこ

に映し出されているのは、大人たちがどう関わってきたかということだと思っんですね。私は先生方と、失敗事例研究会というのをあちこちでやっています。失敗から学ぶ。問題があるということが大事なんです。発想を転換しないとダメです。問題があることが不幸だと思われているんですね。そうではありません。これは臨床心理学では創造的退行... クリエイティブリグレーションという言葉がありますが、閉じこもりというのは木に止まっている蝉のようなものです。外からは、カラの中で美しい羽根が準備されているのが見えません。でも、ある高校生がこう言いました。「先生、僕は今まで親のために学校に行きました。でも、これからは僕のために学校を休みたいと思いました。それは自分探しのためです。学校にいったら自分が自分でなくなってしまう」。僕のゼミには必ず不登校を経験してきた子が入ってきます。最近では高校中退者も必ず入ってきます。不登校児から見た不登校の研究とか、中退者から見た高校の研究という論文が毎年必ずあります。彼らは鋭い論文を書きます。評論家はいっぱいいるけど、わかっていないと、みんな教師になっています。不登校を経験した自分の心の傷みというものを生かして立派な教師になっています。あるいは今、通新教育で卒論を書き上げた人は、中学校時代60日くらいしか学校に行っていない。シンナーを吸って非行に走って、少年鑑別所に入りました。その若者が今はもう結婚して、中学高校で1年のうち半分くらい、講演をしているんですね。自分が感じた心の傷みを作詞作曲して、ギターで歌い、講演をするんです。自分をわかってほしい、自分がなぜシンナーを吸わずにいらなかったのか、反抗せずにいらなかったのか、なぜ学校に行けなかったのか、そんなことを歌にしているんですね。その歌を中高生が講演で聞くだけで、もう今日からシンナーを吸わなくていいという子がたくさん出ているんですね。それは、自分の気持ちをわかってくれる人が、たった一人でもいれば、それでいい。つまり、共感力とか共感性とっていますが、親が子どもの気持ちをわかる。イクノ学園では、これを魂の出会い直しとっています。全国から2ヶ月に1回、不登校児の親が集まり、いろんな親やいろんな子どもと話をします。そして、今まで冷たくわが子を見ていた親が、だんだん子どもの方に近づいてきて、子どもがなぜ学校に行けなくなったのか、子どもの視点で子どもの不安が受け止められるようになる。これが、親が変わるということです。

今日は「親が変われば子は変わる」という3つのポイントを申し上げたいと思います。親が変わるとはどういうことか。まず第一は、子どもの見方が変わるということ。子ども感が変わるということです。例えば、五体不満足を書いた乙武くん。彼のお母さんは1ヶ月して初めてわが子と対面した。その時、お母さんの口から出たのは「可愛い」という言葉だったと書いています。重い障害を持ったわが子を見て、哀しくないはずはないし、涙が流れないはずはない。でも決して可哀想にとか、同情の表情も言葉もかけたことがないと彼は書いています。つまり、お母さんは僕の言葉で言えば、子どもの現象ではなくて、子どもの本質を見たんだと思います。子どもをどう見るかという時に、子どもの本質を見るのか、子どもの現象を見るのかの違いです。実際には難しいことですが、宮本武蔵も、

心の眼で見ることを大事にしると言っていますね。「窓際のトットちゃん」の中で、黒柳徹子さんは、「本当はいい子なのに」といって叱られたと書いています。黒柳徹子さんの個性や人格をしっかり信頼し、それを肯定しながら注意をしている。人格を責めていないので、ムカつき、キレることはありません。人格そのものを否定すると、子どもはムカつき、キレます。これは、大きな違いです。僕は、優しさに裏打ちされた厳しさだけが子どもを変えようと言っているんですが、その優しさは、子どもの個性や人格の良さ、本質というものを親がしっかり認めるといことです。親が認めてくれなければ、子どもはその信頼に応えようとはしません。信頼は裏切ることができません。しかし、信頼がいかに難しいかは、スクールウォーズのモデルになった山口リョウジ監督が言っていますね。112対0で花園高校に負けた京都伏見工業高校ラグビー部の監督でした。誰も涙を流していない。誰も悔しいと思っていない。これが現象です。シラケきっています。普通はここであきらめるんです。でも山口さんは、自分がこの子たちの悔しさを引き出していないことが問題なんだと考えた。これを「無罪の七施(罪がなくても施せるものが七つある)」という中では「心施(しんせ)」といいます。これは、心を込めて心を尽くして心を伝えるということ。親が子どもに対して、心を込めて心を尽くして心を伝える。その時にはどんな問題児も変わるんです。

私が昨年「師範塾」をつくった理由は、山口監督のような先生を30人作りたかったからです。たった一人でもいれば学校は変わるんです。例えば、大阪に今40歳の体育教師がいますが、大阪で最も家庭環境の悪い学校の教師をしています。子どもたちは家に帰らたがらない。ずっと学校に残っているんです。そこで砲丸投げとか、中学校に入るまでにそんなに練習しなくてもできる陸上競技を徹底的にやらせていて、今、全国優勝が連続12回です。家庭環境の善し悪しは関係ない。自分とはとにかく心を込めて心を尽くして心を伝える。それで子どもを変えてみせる。その自信にあふれていますね。同じことが親にも言えます。学校が悪い、教師が悪い、周りが悪いではなく、やっぱり親が変わる、親が子どもをどう見るか。子どもの人格を信頼しながら行為を否定する。これは、私が、仏教ジトク学園のハナワという学園長から学んだことです。学園長は私にこうおっしゃいました。「自分は30年、極悪非道の非行少年、入れ墨をしているような非行少年と暮らしてきて、一度もこの子たちの人格を疑ったことはない」と。それだけで、僕はもう絶句でした。ここに教育の原点がある。そこまで親は子どもを信じてるだろうか。他人であるハナワ先生がここまで信じているのに、親はどうだろうか。そう思いました。

親が変わるといことこの2番目は、関わり方が変わるということ。親が子どもとどう関わるか。それはこの後のシンポジウムでディスカッションしたいと思いますが、今日私が申し上げた「しっかり抱いて、下におろして歩かせる」ということ。そして、優しさに裏打ちされた厳しさで子どもと関わるということ。3番目は、親の生き方や親の感性、感じ方が変わることです。「すみれと母ちゃん」という詩があります。「ものすごく寒い日、僕は学校の帰り道、紫色の花を見つけた。ああもうスマレが咲いている。僕はうれしくな

った。そのスマレの花を採って走って帰った。戸を開けるなり、母ちゃん見てごらんよとスマレの花を差し出した。そしたら母ちゃんが、スマレぐらいで大きな声出すなと顔をしかめて言った。僕は何もする気がなくなった。つまり、親がもう美しいものを美しいと感じる心がなくなっているんですね。

レイチェル・カーソンという人の本をぜひ読んでください。「センスオブワンダー」といって新潮社から翻訳が出ています。著者は、環境問題に熱心なアメリカの女性です。このタイトルはどういう意味かということ、神秘さや不思議さに眼を見張る感性です。子供達の感性を育てるためには、目に見えないものを美しいと感じ、喜びを分かち合っている大人が子どもの周りに一人いればいいんだと言うのです。お父さん、お母さん、先生でもいいのです。

例えば、私は重度の障害児の施設に毎年学生を連れていくゼミ合宿を行ないませんが、その子どもたちが書いた川柳があります。知的年齢1歳未満の子どもたちです。「ろうそくは光わけあい身をけずる」「モチさんはいつもたたかれ、痛そうだ」「すいか割り、割られるスイカ、痛そうだ」「ゴキブリはみんなに嫌われ哀しそう」。現代っ子はおそらく作れないと思います。これらは学んだ知識でなく、自分が感じたものを書いているわけです。アンダースタンドとリアライズという英語を使うんですが、頭でわかるというのが、今のアンダースタンドの教育です。でも何が欠けているかということ、しみじみ心で実感する……リアライズ……感じる力を育てる、感性を育てる教育です。それは、小さい時に育てねばならないものです。いわば、知育、体育、徳育の土台になるものが感性なんです。だから、レイチェル・カーソンはこう言ってます。「みんなは徳育、体育、知育ばかりを考えているけれども、もっと幼い時に豊かな感性を育てる根を張る。土壌をしっかりと大地に張るということ。その感性や心を育てるといって教育を失っている。それが大事だということを見失っているのではないか」と。そういうことも、ぜひ考えてみたい。最後ですけれども、この川柳を詠んだ重度の障害児の施設に入りますと、「目に見えるものより、目に見えないものを」と書いてあります。「偉い人よりりっぱな人になりなさい」と教えています。明治以来の学校教育は、末は博士か大臣かという立身出世主義でした。いい大学に入って、いい会社に就職することが目標になってきました。しかし、今、子どもたちは将来のための準備ではなくて、今を生きる喜びを求めています。今日一日生きてて良かったという、その喜びですね。偉い人になることが目的ではなくて、立派な人になる……偉い人と立派な人はどこが違うのでしょうか。立派な人は、目に見えない価値を豊かに感じ、喜びにあふれている人たちです。幸せを実感している人たちです。その幸せや喜びというものを、親たちがどういうふうに感じているか。それが子どもに反映するんだと思っています。小学校4年生の子が「ひいおじいちゃんは宝」という詩を書きました。94歳の寝たきり老人です。ひいおじいちゃんは長生きすればするほど、お金がかかって損をします。寝たきりだから、もう役に立ちません。でも、ひいおじいちゃんは宝と書いています。家族が、ひいおじいちゃんを宝のように接しているからです。つまりそれは、存在することの価値です。ひい

おじいちゃんがそこに存在することの価値を感じ、何かのためではなく、存在することの価値。死んでいく人が、床のそばにいて求める「人が死んだらどうなるのか」「生きてきた意味はどういうものか」ということを感じたい、知りたい……臨床の知恵といわれる根本の問題ですが、実はおじいちゃんやおばあちゃんという死んでいく人だけがそれを求めているのではないということ。「何のために自分は生きるのか」これは、高校生が読売新聞に投稿したのですが、「先生方は強く生きねばならないという。しかし、なぜ強く生きねばならないか、誰も教えてくれない」。何のために生きるのか、自分の存在価値は何なのか、将来のための準備ではなくて、そのことが今、問われている。その意味で、家庭というものの温もりを取り戻すことが大事ではないかと思います。

P T Aの会合で、女性校長がお母さん方に向かって「雑巾ぐらいはスーパーで買わないで自分で縫って渡してください」といいました。すると、あるお母さんが「スーパーで買おうが私が縫おうが、雑巾は雑巾です」と言った。「そんなものにこだわるのは単なる親の見栄だ」と言ったら、会場のお母さんが全員拍手をしたという実話がありました。この国の教育はおしまいだと思った、と、あるエッセイストが言いました。つまり、お母さんが縫ってくれたというプロセスが、子どもの心を支えるということがわからなくなっているお母さんが出てきた。かつては、ボタン一つで、ご飯が炊ける、お風呂も沸きます。昔は母親が薪でご飯を炊き、お風呂を沸かしていました。そのプロセスが、私たちの心を支えてきました。便利さ、豊かさ、快適さを得て、我々は心の幸せ、喜びを失った気がしてなりません。しかし、昔に帰るわけにはいきません。時代の流れを変えることはできませんが、いかにして心の温もりを取り戻すのか。とりわけ、家庭における親子の心のつながりというものをどう取り戻すのか。そのことをぜひ、今日のこの機会に、皆さんと共に考えたい。この後、皆さんと共にディスカッションしたいと思います。ありがとうございました。